

どのような生徒を育てるか

2019年4月に実施された全国学力・学習状況調査では、複数の技能を統合する問題が出題されていました。たとえば、読んで書いたり、聞いて話したりという形式です。このような問題は、今後の大学入試や高校入試で、ある程度の割合で出題されることになるだろうと思われます。この場合、まず、「知識及び技能」を持っていないと解けません。それから「思考力、判断力、表現力等」がないと、目的や場面、状況に合わせて産出できません。そして、「もうやめた」という気持ちではなく、「よし、やってやろう」と粘り強く課題に取り組む姿勢がないとできません。上述した三つの観点が含まれており、現実場面にも近い問題となっています。

ところが、このような問題の正答率は概して低く、しかも無解答は20%程度にもなります。つまり、五分の一ぐらいの生徒が解答をあきらめたということになります。現状では、粘り強さ（レジリエンス）や問題に取り組むためのやる気が十分に見られない、ということがよくわかります。

そこで、新しい学習指導要領下では、「主

体的・対話的で深い学び」を通して、このような問題にも解答していけるような生徒を育成するというのが、大きな目標になっているわけです。テストへの対応というよりは、そこに現れる現実場面への対応のため、と考えていただければよいのかもしれませんが。

つまり、新しい学習指導要領で求められているのは、「この場面と条件では、この行動がおそらくもっともよいだろう」とか、「自分にとってこれがよい答えだ」ということを考えさせる教育にしていく、ということだと思います。一つの正解を選ぶというより、場面にあった最適解を考えて求めるような教育にする、と言ってもよいかもしれません。外国語科で、覚えた表現をくり返すだけではなく、場面や条件に即興的に対応することが求められているのも、このような教育観の表れだというわけなのです。

参考文献

文部科学省(2018).『中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 外国語編』開隆堂



No.1 英語教育改革 —Now and Then— 根岸 雅史

No.2 思考力・判断力・表現力 松沢 伸二

No.3 主体的・対話的で深い学び 竹内 理

No.4 新学習指導要領施行に向けた授業改善 日臺 滋之

No.5 小中高の連携 今井 裕之

SSD 三省堂

三省堂 教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

■大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL 06 (6341) 2177
■名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F TEL 052 (953) 9211
■九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL 092 (531) 1531・1532
■札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F TEL 011 (616) 8722

主体的・対話的で深い学び



竹内 理 (関西大学)

新しい学習指導要領の要点

新しい学習指導要領で最も重要なポイントは、小・中・高等学校を通し、英語だけでなくすべての教科において、育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの観点で整理していることではないかと思えます。

その三つの観点の一つ目は、「知識及び技能」の習得です。知識と技能がひとまとめになっていることに着目してください。つまり、知っているだけでは不十分ということになります。今までは、知識があれば一定の評価を受けられたと思いますが、技能が加わったことで、実際に使えるところまで求められていることがより明確になりました。

さらに、この「知識及び技能」には「生きて働く」という枕詞が付きまします。「生きて働く」というのは、つまるところ、現実の場面で活用できるということに焦点があたっているということです。このように考えてみても、「知識及び技能」としてひとつにまとまっていることは、注意すべきポイントではないかと思えます。

二つ目は、「思考力、判断力、表現力等」の育成です。これは、正解のわからない未知

の状況に対応するために必要な能力です。今までであれば、正解は選択肢から選べましたが、これからはそうはならない。よく考え、判断し、自分の言葉で表現していく力を身につけなさいということです。

三つ目は、「学びに向かう力、人間性等」の育成です。意味するところが曖昧で、わかりにくいかもしれませんが、「メタ認知」に関わる力、つまり計画を立て、それを実行し、振り返ること。それから学びへの態度、リーダーシップ、チームワーク、感性、思いやり、倫理観、粘り強さ（レジリエンス）といったことが含まれています。

この三点を「主体的・対話的で深い学び」を通して実現していくというのが、新しい学習指導要領の立て付けになっています。

主体的・対話的で深い学び

主体的とは

「主体的」とは、自ら考えて取り組むことですが、よく“proactive”という言葉が訳語になっています。しかし、私は“agency”という言葉があてはまるのではないかと思えます。agencyは「行為主体性」と訳される概念です。これは、第一にgoal（めあて）とplan（見通し）をもつこと、第二にknowledge（知識）と

skills（技能）をもつこと、第三にinterest（興味）とwill（意志）、resilience（粘り強さ）をもつこと、第四にreflection（振り返り）を行うことという四つの要素から成り立っています。

つまり「主体的」というのは、自ら「めあて」をしっかりと持ち、「見通し」を立て、それをやり遂げるだけの「知識」「技能」を身につけ、そして「興味」を失わず、簡単に「挫折せず」に、計画が予定通り進んでいるか「振り返り」を確認することだと考えられます。

また、「主体的」な姿勢は、メタ認知・行動・情意の側面を含むため、「自己調整学習」と結びつけられることも多いようです。計画を立てて、それを行動に移し、感情（動機）もコントロールできる、つまり自分で自分の学びを調整して学ぼうという考え方です。

対話的とは

「対話」とは、やり取りするだけでなく、相手の話を聞き、認め、考え、表現することも指します。“interactive”という言葉が訳語として出てくる場合がありますが、私は“dialogic”という言葉で考えるとよいのではないかと思えます。

では、誰と対話するのでしょうか。まず教師と対話します。仲間や家族、地域の人とも対話します。それから自分と対話します。自分との対話とは、振り返りを含みます。そして、書物、つまり先人の知恵と対話します。実に多くの人と対話の可能性があるので。

ある大学で、静かなアクティブ・ラーニングというのを見たことがあります。誰も何も言っていないのですが、頭をしっかりと動かして

自分と対話している。つまり、対話とは、教室の中でワイワイガヤガヤするだけではない、ということもおさえておきたいと思えます。

深い学びとは

最後に、「深い学び」です。“deep learning”という訳語をあてることもありますが、これだとAI（人工知能）の深層学習のことを指しますので、私は“deeper learning”がよいと考えています。あるいは、“in-depth learning”でしょうか。では、どのようなときに「深い学び」は起こるのでしょうか。

まず、既知の情報と新しい情報を結びつけると学びは深くなります。それから、自分の考えや感情、行動と結びつけるとき。そしてこれらが必ずしも自分の考えとは合わない場合（認知的不協和）、つまり、「あれ?」と思うときに、深い学びは起こるのだらうと思えます。そして、この「深い学び」は、自分で問題を見つけて解決策を考えるようなことにもつながっていくでしょう。

『中学校学習指導要領解説 外国語編』（2018）には、上記を各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることとあります。ということは、外国語科では、他者との関わりに注目し、目的や場面、状況をおさえたいうえで、情報を整理して自分の考えをつくり出すことが「深い学び」であるようです。

それでは、この「主体的・対話的で深い学び」を通して、どのような生徒を育てることが外国語科に求められているのでしょうか。もう少し具体的に見ていきましょう。